

[021] 雅俗表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7183526>

出版情報：雅俗. 21, 2022-07-15. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：

参加者の傍聴記

村上 義明

『雅俗』の復刊十周年を記念したシンポジウム「雅俗論のゆくえ——新しいパラダイムの

創成をめざして——」が、二〇二一年十二月二十六日にオンライン形式で開催された。開
会および閉会の挨拶は高橋昌彦氏（福岡大学）
で、司会は川平敏文氏（九州大学）であった。
以下、シンポジウムのプログラムに沿いつつ、
一部に後半の討論（コメント&討論、および
自由討論）の内容を交えて紹介する。

川平氏による基調報告「雅俗論史——パラ
ダイムの形成——」では、これまでの雅俗論
の解説と問題提起がなされた。中村幸彦氏に
よって、一九五〇年代に提唱された雅俗論は、
それまでの近世文学とは、すなわち町人・民
衆文学であるという認識に対して、これを完
成された様式をもつ第一文芸（雅）と、新し
く未完成な第二文芸（俗）とに区別したもの
で、それは享保以後、明確に意識され、後期
になるにしたがって希薄化し、近代に至ると

いうものであった。

これを継承した中野三敏氏は、従来の元禄
期と化政期とを文化が高まった時期とみなし、
中期はそれが盛り下がるという認識に対して、
近世の前期（十七世紀）・中期（十八世紀）・
後期（十九世紀）をそれぞれ人の青年期・壮
年期・老年期になぞらえ、その壮年期がもつ
ともその人らしく成熟した時期であるように、
近世中期こそがもつとも近世らしい時期であ
ると提唱された。また、この時期は雅の割合
の高い前期から、俗の割合が高くなる後期へ
の過渡期にあたり、まさに「雅俗融和」の様
相を呈していたという。そして、これら中村・
中野両氏の雅俗論以降、雅の領域にも注目が
集まり、研究が盛んになっていった例として、
一九七〇年代以降、和歌および漢詩文にかん
する研究書が盛んに刊行されていることにも
言及された。

続いて、両氏の雅俗論とは異なり、近世の

前後をも含めた小西甚一氏の雅俗論が紹介さ
れた。これは、たとえば日本文芸史を古代
（俗）・中世（雅から俗）・近代（俗）の三分
でとらえ、「型にはまる」ことを志向した雅
と、「型から外れる」ことを志向した俗が交錯
していくというもので、この場合、中世の一
部ととらえられた近世は、その中心理念が雅
から俗へと移っていく時期にあたる。こうし
た小西氏の雅俗論は、中村氏の雅俗論と時期
を同じくするものの、従来、言及されてこな
かったという。

これらをふまえて川平氏は、俗の概念がい
つ生じたのか、そこに儒学や博物学、それか
ら医学の展開がかかわっていないか、また近
世後期は本当に雅俗の意識が希薄化したのか、
そして中期のみならず前期や後期にも、それ
ぞれに近世らしさがあるのではないか、とい
う問題提起をされ、中世からの継承と、近代
への展開の様相、それから各ジャンル内にお
ける雅俗の流動や、作者個人における雅俗意
識の差異について考えていくべきであるとい
う見解を述べられるとともに、すでに成立し
ていた中国の雅俗論との比較や、これまで意
識的に避けられてきた印象のある身分制度を

も視野に入れた研究の必要があることにも言及された。こうした問題意識をふまえ、続くパネルディスカッションでは、それぞれの専門分野からの報告がなされた。

報告1は、深沢了子氏（聖心女子大学）による「雅俗の境目——宗因を中心に——」で、宗因が雅と俗をいかに詠み分けたのかについて、いずれも寛文三年に詠まれた連歌「春やあらぬ」百韻と、俳諧「来る春や」百韻の典拠を示しながら報告された。そして、連歌は典拠となった古典の世界を大きく逸脱しないのに対し、俳諧は典拠の語を用いつつ、それをずらして現実化・滑稽化していく様相があるとして、同一人物の文芸における「雅俗の境目」を示された。そのうえで、以後の俳諧における「雅俗の境目」についても考察していく必要があると述べられた。

このように、同時期に成立した異なるジャンルの二作品の詠み分けを分析することで、作者個人における「雅俗の境目」が示された点は、とても興味深く思われた。この詠み分けが個人的なものか、あるいは普遍的なものか、または近世の前期・中期・後期において違いが生じるのか、生じるならばその背景に

は何かあるのか、といった点とともに、後に雅の領域とも認識される俳諧について、相対的な雅俗論の例の一つとして、引き続き注目していきたい。

報告2は、飯倉洋一氏（大阪大学）による「雅俗再考——秋成を例に——」で、従来の雅俗の概念（古Ⅱ雅、新Ⅱ俗）を「雅俗時間論」としたうえで、「雅俗人品論」と「雅俗空間論」という考え方を示し、これを秋成の文事に即して報告された。まず中国由来の「雅俗人品論」とは、文芸・芸術の営為者によって雅俗の別が生じるというもので、たとえば雅の人物が俗の文芸をなしても、それは雅の範疇にあるという。この場合の雅と俗は、上方における堂上と地下にあたり、より広く朝暮関係に対応させることができることとされた。また「雅俗空間論」とは、天皇と、その近くに存在する人・物・事を雅とし、そこから空間的に離れたものを俗ととらえるもので、それぞれに属する人・物・事の移動に伴って、「雅俗往来」がなされるという。

対象をとらえる際に、第一文芸と第二文芸というジャンルによる雅俗論とともに、今回示された「雅俗人品論」や「雅俗空間論」と

いう概念を同時に用いる場合、例えば俗に分類される作者が行った雅の文芸は、雅俗のどちらであるのか、といった問題を生じさせる。どの概念を用いて対象をとらえるかによって、雅俗の線引きには絶対的な面と、相対的な面があることを改めて感じた。

報告3は、小林ふみ子氏（法政大学）による「雅俗の融和はなにを意味するか 大田南畝から考える」で、雅俗の優劣や上下は絶対なのかという問題意識のもと、南畝に即して、雲茶会を例に報告された。これは当時盛り上がりをもせていた雅物に対する好古趣味・古物探求の場である書画会と並行して行われた、形式としては宝合に近い「俗ナル古物」を集めた会であったが、ハルオ・シラネ氏の説を紹介しつつ、これは単なる雅事の卑俗化にとどまらない、民衆文化（Ⅱ俗）によるエリート文化（Ⅱ雅）の制度的な利用であり、雅俗の価値を厳然たる上下ではなく、対置していく部分があったのではないかと述べられた。そのうえで、雅俗を一般的な用語で定着させていくことと、雅俗間で起こったことを国・文化圏・時代を超えて意義付けていく必要があると提言された。

この提言は、近くは学生に対して、また広く海外の研究者に対して雅俗を普遍的に語ることを意識したものであった。研究の蓄積により、今後さらに拡大していくことが予想される雅俗論をどのように語っていくべきか、議論の深化が求められよう。なお、小林氏が討論の際に、最近の状況として、俗文芸（とくに黄表紙・洒落本）の研究が少なくなっていることにも言及されたのは印象的であった。これについて詳しく議論する時間は得られなかったが、雅俗論や各ジャンルの研究にとどまらない、文学研究の未来にかかわる重要なテーマであり、より活発な議論が必要になるう。

報告4は、菱岡憲司氏（山口県立大学）による「馬琴と小津桂窓（久足）の雅俗観」で、まず馬琴の雅俗観を示し、その文体論を歌論によって理解した桂窓の雅俗観について報告された。その桂窓の雅俗論には、小沢蘆庵の系譜に連なる歌論の影響があったという。それは、情は今古和漢雅俗一致であること、新俗が古雅をまねることは誤りであること、そして俗情を俗語で表現するといったものであった。そのうえで、これはあくまで実作を前提とした雅俗論であったことが指摘された。

このように、ある人物のもつ雅俗観と、その形成にかんする視点は、とても興味深かった。

また、菱岡氏は文学を研究する際に研究対象の文事を支えた生活基盤を視野に入れる必要があり、文学研究がこれまで見過ごしてきたであろう地方文書や商用文書なども扱うことを提言された。これについて、討論の際、深沢氏は宗因や蕪村の例を挙げて、彼らの文芸が求められたもの、つまり暮らしていくために必要であったという外的な要因が、その文学活動に関わっていることについて述べられ、これをうけて飯倉氏は経済力と雅俗の関係の重要性についても指摘された。また小林氏による十九世紀における雅文芸の商売化という発言も印象的だった。さらに菱岡氏は、江戸時代のみならず、どのような社会においても経済および身分的な安定と、書かれるものには相関関係があると述べられた。

このほかにも菱岡氏は、歴史を専門とする研究者との交流から得られたことについて言及された。たしかに資料の調査方法や、論文に対する考え方など、文学研究と近い領域であっても、その違いが意識されることは少なくない。それが研究者個人の考えによる差異

なのか、学問領域の違いに由来する問題なのか、より広く領域を横断した議論によって明確になるだろう。他領域との交流や研究により、どのような未来が期待できるのかについても考えてみたいテーマである。

続くコメント&討論では、まず勝又基氏（明星大学）による各報告へのコメントがなされ、これをふまえた討論では、隣接領域の学問、とくに歴史学との接続についての議論が展開された。最後に川平氏は、雅俗とは固定的なものではなく、相対的なものであることが見えてきたとしつつ、海外の文学研究との接続の必要性についても言及された。

今回のシンポジウムを通して、「雅俗論のゆくえ」には、文献に即した研究の継続と、それをどう伝達していくのか、という二つの方向があるように思われた。

前者には、たとえば近世前期・中期・後期のそれぞれの時期とジャンルにおける雅俗の違いや、個人の雅俗観の形成と展開などが含まれよう。作者やジャンルについてのきめ細かな研究を続けながら、各時代にとどまらない、日本文学史を意識した研究の必要性が改めて指摘されたように感じた。また飯倉氏が

討論中に述べられたように、雅俗論がときに混乱を招くおそれのある概念であることを念頭に置くことと、この概念に依拠しすぎるのではない、新たな観点の提示にも意識的になる必要がある。

後者にかんしては、たとえば学生や、対象とする時代や分野を異にする国内外の研究者に、雅俗論がどのように語られ、また他言語に訳されてきたのか、それは今後どう展開していくのか、そして研究の世界にとどまらず、どのように世に問われていくのか、など興味は尽きない。

閉会の挨拶時、常時七十から八十名の参加があったことが伝えられた。シンポジウムは大盛況のうちに幕を閉じた。今回提示された諸問題を含めて、今後、多様な議論がますます活発に展開されることが期待される。

最後に、困難な状況のなか、シンポジウムを開催いただきまして、ありがとうございます。